



親の会だより

第85号平成28年9月発行

東大阪市手をつなぐ親の会
(年 3回)

(題字 吉岡名誉顧問)

相模原障害者殺傷事件について

会長 坂本 ヒロ子

私は7月26日未明に「津久井やまゆり園」で起きた事件の報道に驚愕し、心の整理がしばらくつきませんでした。

今まで諸先輩の方々が、障害者の理解啓発にがんばってこられ、またこの4月から障害者差別解消法も施行され、これからという時に・・・私達は今までなにをしてきたのだろう・・・わかりあえることはないのだろうか・・・と考えをめぐらしておりました。

そのような中、いち早く、全国手をつなぐ育成会連合会 久保会長は『障害のあるみなさんへ』とメッセージを出されました。力強いことばに共感し、子どもたちのため地道に地域へ出て障害者の理解啓発のため、それぞれの立場で活動を続けなければならないと決意をあらたにしました。

吉岡荘太郎青山会理事(元厚生労働省→大阪府→厚生労働省)は、この事件を心配してメールを7月28日送って下さいました。

手をつなぐ親の会の全国大会が開催されたばかりの神奈川県で、19 人もの重度知的障害者の尊い命が、耳を覆いたくなるような暴言とともに奪われたことに、一市民として激しい衝撃を受け、心の底からの怒りを禁じ得ません。また六万寺を始め、青山会の各施設で生活される皆さん、その保護者、ならびに職員の方々が、この到底許すことのできない事件からどれだけの恐怖と衝撃を受けられ、尊厳を傷つけられたかと思うたび涙を拭う毎日です。これまで以上に皆さんに寄り添い、全力でケアをして頂くよう心からお願いいたします。一方、親の会連合会のホームページでいち早く公表された声明は、何遍読んでも、長い年月をかけて知的障害者の尊厳を守るために活動されたひと達でなければ発することのできない力強さと優しさに溢れた素晴らしいメッセージでした。障害の有無を問わず、お互いを尊重しながら、かけがえのない日々の命の火を灯している全ての人々を励ますと共に、人間としての本当の連帯を呼びかけるもので、日本国憲法前文にも匹敵する荘重さがあります。今、この声明が、テレビやネットを通じ、多くの国民の共感を得ながら広がっており、おそらくは全国の小中学校の教育現場でも取り上げられるであろうことを思い、障害者福祉の未来への一縷の光明も見出だしているところです。

知的な障害のある人、そして私たち親のことをいつも案じて下さっている方のおこ
とばで、うれしくありがたく思いました。

第3回全国手をつなぐ育成会連合会

全国大会に参加して(7/2~7/3)

東福六万寺保護者 黒崎 陸子

第3分科会では“自分らしさを発揮して生きる可能性を引き出す支援の方程式の実
施”と題して、シンポジストお3方の話を聞きました。

Studio COOCAの関根様は、施設を開所されて25年、障害者アートの可能性に
ついて話された。作業に全く興味を示さない人、背中を向けている人もやりたいこと
のサインは出しているはず。そのサインを受け止めず、仕事を与え当てはめる支援を
するからどんどん悪くなる。作業を決めてしめたら、秘めた能力は引き出せない。何
もしない人、何も出来ない人のいる空間の中でアートが生まれた。

ただひたすら、紙を切ってボール紙にはり重ねるなど、25年前はゴミだったものが
アートに生まれ変わった。少しずつ芸術だと認められ、現在はギャラリーとカフェを
開いている。

障害を持っている人は、不自由さを治そうとは思っていない。施設の目的、役割と
は?に明確な答えは誰も持っていない。福祉的発想では、限界な障害者福祉サービス、
それならやりたいことをやる。最初の工賃倍増計画は失敗し、現在新5カ年計画が実
施されている。

コメンテーターの青山学院大学の杉田先生は、“後追い支援”やりたいことのサイン
をしっかり受け止める福祉の原点その人から離れない。皆で話し合う笑顔を大切に。
ないものを数えるのではなく、あるものを数える。

NPO UCH1(G・Hが家といえる場になるようにという願いを込めた)の牧野様。
就労して地域社会で孤立している人達を受け入れる活動をして居られる。

障害者福祉の激動の21世紀は“地域でのくらし”というキーワードの10年であっ
たと思う。親からの虐待、学校でのいじめ、差別等々の厳しい現実のなかで、もう一
歩を踏み出せず逃げてしまう本人の姿に直面、そのなかから自分史作成支援が生まれ、
これまでの自分、今いる自分、これからの自分へとつながっていく支援を行っている。

仕組みに当てはめようとする小さな社会とのつながり、そうではなく自己実現、
自己決定することでより大きな社会につなげて行く。当事者との出会いから人間とは、
生きるとは何かを問う。声なき声を聞くこの仕事は当事者に叩きあげられてゆくこと
だと思っている

杉田先生は、長くご本人からの聞き取りを続けてこられた。その人が生きてきたこ
とが素晴らしい誇らしいことだ。虐待も乗り越えてきたではないか、素晴らしいこと
なのだ。壁にぶち当たったら少し休んで自分史作成支援を受ける。すると次の山が乗
り越えられる。自分がそこに居て受け止めてくれる人が居る。サービスは無味乾燥な
ものだ。人に寄り添う、離れないことが大切と話された。

ハイテンション かしわ様(ミュージシャン)

ロックンロールバンドを15年やって来て、障害を持った仲間が年をとってきた。この人達のこれからの人生をと考え、ロックンロールバンドを仕事にするNPOを立ち上げた。よく神奈川県が認可してくれたと思っている。

プロフェッショナルとして何を提供出来るか。専門性に特価したものが大切と知っている。

障害者の将来の夢の選択肢が少し広がったかな? ほんのささやかな一歩かな?と知っている

自由を押さえつけて決められた案で行くつまらなさ。障害者の可能性を削いでいる。

杉田先生は、笑顔を大切にしていける支援。

地域のまわりの作業所と同じことをやっていると駄目、特価した支援を。

山下清さんのしたいことは放浪。それを支えて戻ってきて、世界中の人を幸せにしたいという想いで、あのすばらしい絵が生まれたとのこと。

3時間半、心に沁みるよいお話を聞き、元気をいただきました。高齢になり、最後の参加と出掛けましたが、何とか頑張って参加しなくてはいけません。

ありがとうございました。

第1回 しゃべりま専科!

4月熊本・大分県で相次いで大きな地震が発生し、障害のある人は、一般避難所での生活が困難なため、車の中で避難せざるをえなかった人がおられたこと、また東日本大震災での教訓が生かされず、様々な問題が発生したことを聞きました。

平成25年、東大阪市手をつなぐ親の会ではプロジェクトを発足し、地域支え合い体制づくりモデル事業の助成金をうけ「災害時、知的障がいのある人をみかけたら」「障がい児者・高齢者のための防災マニュアル」「災害お役立ちノート」「SOSカード」を作成し、防災頭巾を東大阪市手をつなぐ親の会より、本人へ配布させていただきました。もう一度確認して役立ていただきたく思います。

6月30日開催のしゃべりま専科では、地震等災害が起きた時、心配なことについて話し合いました。

災害が起きた時心配なこと

日 中

- ・施設に任せるほかない?
- ・各施設の災害マニュアル、色々なパターンを想定しての避難方法を示してほしい。

夜 間

- ・グループホーム、ショートステイはどうなる?
- ・避難訓練の実施は?
- ・六万寺は夜間支援員が少ない。いざという時の体制は?

全体的

- ・まず、自助努力。
- ・地域の人に障害者の存在を知ってもらうため地域活動に参加。
- ・薬の確保(1ヵ月分位余分に)
- ・病気、障害特性等、職員の専門性アップ。
- ・要支援者リストへの登録、対象者を手帳所持者全員に。
- ・希望者には個別の避難計画を作成してほしい。

福祉避難所

- ・市は場所を明かしていない。
- ・仕組みを知りたい。
- ・障害について専門性のある人が必要。
- ・福祉避難所にもいることが出来ない重度の人は？
- ・物資が届く？

第2回 シャベリま専科！

9月16日開催のシャベリま専科では、神奈川県相模原市の津久井「やまゆり園」で起きた事件について、大阪手をつなぐ育成会の小尾局長の考えた6つの問題(社会思潮、施設や事業所の安全管理、措置入院制度、重度障害者の緊急救済、事件や災害時の費用負担、その他)の社会思潮の問題を取りあげ、みんなで話しあいました。

報道を聞いたとき

- ・ただただビックリした、ショック。
- ・今までの活動が全否定されて様な気がした。
- ・久保さんの迅速な対応に嬉しかった。心強かった。

私が今後すべきこと

- ・今まで通り淡々と。
- ・地域とのつながりを大切に。
- ・地域の行事に参加。

親の会が今後なすべきこと

- ・地域の人からの言葉・行為で励まされた、嬉しかったことを集め希いにのせる。

*シャベリま専科では、その他たくさんの意見がありました。

(シャベリま専科役員)